

た家庭生活を送った。ふだんは村の子供たちに読み書きを教えたり、第一章で触れた重野安禪や漢学者の岡程進おかくちしんらと交流したり、狩猟をしたりして過ごした。

岡からは漢詩の手ほどきをしてもらったようだが、あまり熱心ではなかったようで、この時の作品は何も残されていない。やはり、さほど不満のない生活のなかに、文学作品は生まれにくいことか。こういう穏やかな生活が、三年後の本土召還の日まで続く。

ところが、徳之島、沖永良部島への遠島は、奄美の場合とがらりと変わる。そもそもこの二度目は、罪人としての遠島である。この二度目の遠島、とくに沖永良部島での苦しい生活の中で文学に目覚め、漢詩を作るようになるのである。

一、天歩艱難獄に繋がる身——天を怨みず、人を尤めず——

大老井伊直弼が暗殺された桜田門外の変（一八六〇年）の後、薩摩藩では、当主島津忠義の父久光が、国父という地位に就いて藩政を実質的に掌握した。そして、公武合体を実現するため、いよいよ兵を率いて江戸に上ることになった。そこで、大久保利通の進言を入れて、若い藩士たちに絶大な人気のある西郷を奄美から召還することにした。こうして

西郷は、実に三年ぶりに鹿兒島の土を踏むことになった。

久光の率兵東上に際し、西郷の役割は、九州各藩の動静を探りながら本隊に先行し、本州の玄関口である下関で久光一行の到着を待つというものだった。

ところが、西郷が下関に到着すると、同志から京阪の尊王激派の若者たちが暴発寸前であると聞かされ、今すぐ京阪に行って激派の若者たちを統制する必要があると考え、久光一行の到着を待たずに出発してしまった。これが後れてやって来た久光の怒りを買う一つの原因となった。さらに姫路に到着した久光のもとに、西郷が京阪で激派を扇動しているという根拠のない情報もたらされ、もはや久光の怒りは抑えようもなく沸騰し、西郷を捕縛して厳罰に処することにした。

こうして、奄美から復帰してわずか二か月しか経たないうちに任務を解かれ、今度は罪人として遠島に放逐ほうちくされることになった。流刑地は、はじめ奄美大島のすぐ南にある徳之島であったが、久光ここでは懲らしめ足りないと思っただか、その二か月後には、もっと南の沖永良部島に西郷を移すように命じた。この島は徳之島と琉球の中間に位置し、当時はこちらへの配流が最も重い処分だった。

天歩艱難繫獄身

てんぽ げんなん けつごく つか 天歩艱難に繋がる身

誠心豈莫慙忠臣

せいしん ぢや ちやうしん へ 誠心豈に忠臣に慙づること莫からんや

遙追事蹟高山子

はるか じせき たかやまし 遙に事蹟を高山子に追ひ

自養精神不咎人

みずか せいしん やしな 自ら精神を養ひて人を咎めず

国家が困難に陥っているのに、私は牢獄に繋がれる身となった

こんなことでは、私の忠誠心など、真の忠臣に対して何とも恥ずかしいことだ

昔の勤皇の志士・高山彦九郎先生の事蹟に倣い

自ら精神修養に努め、他人を咎めるようなことはすまい

○偶成…作ろうと意図せず、たまたま詠んだ詩。 ○天歩艱難…天運が悪く困難の多いこと。

○高山子…江戸後期の勤王の志士・高山彦九郎（一七四七—一七九三）のこと。

アメリカをはじめとする西欧列強が日本に開国を求めてくるなか、尊王思想の高まりもあって、徳川幕府は国内外の諸問題で難しい舵取りを迫られていた。そういう国家多難な時に、西郷は久光の怒りに触れて活動の自由を奪われ、忠誠心を發揮しようにもできない状況に追い込まれてしまった。

久光の怒りの原因となった命令違反と激派の扇動に対しては、それぞれ言い分があるけれども、誤解を招いたのは自分にも落ち度があったからであり、いまは高山彦九郎先生を見習って、他人を責めるようなことはせず、ひたすら自己の精神修養に努めようというのである。

起句のなかの「天歩艱難」という語は、中国最古の詩集である『詩経』の小雅篇・白華（全三十二句）の第七句目に見える語である。「天歩」は、太陽・月・星といった天体の歩み、すなわち天の運行のことで、そこから、国家の運命を意味している。

『詩経』は、孔子が編纂したと言われており、儒家の尊重する五つの聖典（五経）のうちの一つである。『詩経』を出典とする語を用いていることから、西郷がこの漢詩集にも通じていたことがよくわかる。

高山彦九郎は、上野国（今の群馬県）に生まれ、十八歳の時、遺書を残して家を出て、